

九州方言の特異性（一）

吉町，義雄
九州帝國大學法文學部國文學研究室講師

<https://doi.org/10.15017/10579>

出版情報：九大國文學. 1, pp.49-72, 1931-09-01. 九大國文學研究會
バージョン：
権利関係：

九州方言の特異性 (一)

吉 町 義 雄

九州方言の日本語に於ける特異性を「九州方言の發生」「九州方言の成立」「九州方言の記録」「九州方言の文學」に分けて思ひつく儘を書き連ねて見る。極めて日の淺い日本方言學の目錄の一行を埋める事が出来さへすれば幸甚である。

九州方言の發生

文獻に即する限り人類の言語は、亞弗利加東北部ニール河畔の埃及に、そして是に輸贏を争ふ西亞細亞メソポタミアのシメルの最古の資料が、西曆紀元前三千數百年に見れば先づ内輪な方であり、東亞細亞の支那はずつと降つて一千數百年であるから、西亞に發して現代の地球表面の文字系統の大部分を占めるセミトのそれと何れに軍配を擧げようか云ふ計算になるが、文字に云ふ文化財許りは何れも自分のものを案出する暇の無かつた優秀民族として、西に希臘の前七世紀は兎も角、東の印度は漸く前四世紀に云ふ記録を有する有様では我が大八洲は彼の天明四年筑前志賀島出土の「漢委奴國王印」を持ち出しても紀元後は勿論として先づ第一世紀の半は過ぎて了つて居る文獻には、寧ろ感謝しなければならぬ。

萬葉假名の最古資料が現存金石文では推古丁卯（六〇七）の大和法隆寺金堂藥師銅像光背銘である限り、丁度お隣の朝鮮では是に相當する彼の吏讀の最古資料たる開寧寫項寺石塔記が八世紀末葉に推定されるに比しては聊か慰むるに足りよう

が、印度半島東海岸のタミル語——非アーリヤ系たるドラヴィダ語の一つ——の五世紀なき云ふのは今後も直接關係は一寸なさそうだから暫く措いても、現代の土耳其言語學は少くも十九世紀末からは日本語よりも數十年古い資料を以て羨ませるのであり、若い若いと思つてゐる馬來語さへ幾分の大膽さを以てするならば、朝鮮より些少ではあつても或は先へ坐るかも知れない状態にあるのである。

そこで板本としては恐らく十世紀以前へは口は出せないであらう所の支那の「三國志」も陳壽チンジュ云ふ名によつて第三世紀の日本語資料として、その「魏志」卷三十なる東夷傳の終りの方にある「倭人傳」が文獻學徒の最初の研究對象となるのであるが、我が九州に屬する又は關係する地名・官名そして人名ナミンを考へられるものが、今後如何に解釋されようとも、「卑狗」「卑奴母離」さては「柄渠觚」なきの官名や、「卑彌呼」「卑彌弓」なきの人名に寫された卑・柄なる紛れのない漢字が日本の國語音聲史上最も重要な一つである「P音考」への贈物は、「一大國」を「一支國」の穿鑿は捨て置いて置いても、先づ感謝す可き代物であらう。若し夫れ「耶馬臺」問題に至つては、中山平次郎博士が「考古學雜誌」昭和六年五月號及六月號における九州説否定への轉換は兎も角として、吾人は直に日本語の第一分裂問題を目下の關心とする。

九州の西南方の島々へ一系列をなす琉球語、否琉球方言こそ北から南へ漸時渡來した日本語であつて、九州から東北の島々へ發展した日本語と同様な世界を別に釀成して今日に至つたものである事は、假に異議を唱ふる人があつても吾人は目下此の問題に就いて應酬してゐる暇はない。「古琉球」の伊波普猷イハツキ氏が雜誌「國語と國文學」第七十六號（昭和五年八月號）での論文が彼の印歐言語學の一八七〇年代の前驅を日本語學において勤めるとするならば、市河三喜氏や神保格氏の手になるイエスベルセンの主著の邦譯（昭和二年）は決して無益ではなかつた譯であつて、それにしても琉球方言が日本本土の内地方言と分裂した時期を世界史の何れの世紀に置く可きかは一論争の價値はあらうが、萬葉假名最古の文獻を有する七世紀には大和の朝廷は譯語ワカゴトを設けなければ南島人の方言を理解する事が不可能である程の差異が出來て居た。

「肥前國風土記」の松浦郡植嘉島の條下にも記される倭人の人種は西村真次氏あたりの古代史家へお委せするごしても、日本の文獻上で論ずる限り彼等の使用してゐた言語は日本語と見做して少しも差支へ無い筈であつて、長沼實海氏は改造社の「日本地理大系、九州篇」（昭和五年八月）「歴史總記」の熊襲において倭人語南洋系説を否定されて居られるが、目下在露のニコライ、アリェクサンドロヴィチ、ニエフスキー氏が曾て先島諸島の宮古の方言は地理的には臺灣により近い八重山のそれよりも訛つてゐて、其處を訪れる大和の人達は何れでも是を支那語の一方言ではないかと思ふ由を時折語られてゐたのを想ひ比べるに、未だに蝦夷語と日本語との本質的異同にさへ無關心な日本人の言語意識としては寧ろ此の千有餘年前の記録はヘーロドトスの筆以上と云ふ譯で、是を更に琉球方言と見るか内地方言と見るか云ふ細かい問題は時代的・方處的關係から數段に分岐する筈だが是亦目下の吾人には直接の關係はない。「大隅國風土記逸文」の串卜郷と必志里（ひしのささみ又ひしり）を何語で解かうとも倭人語とは別問題である筈だ。明治十三年（一八八〇）に白野夏雲氏が「地學協會報告」で、又チエンバンレンが明治二十年の「東大紀要」で九州の地名の一部を蝦夷語で解釋しようが、更には坪井九馬三博士が「我が國民國語の曙」（昭和二年）で南方語を縦横に振り廻はさうが、兎も角も一通りは先づ何よりも日本語の鍵を當てて見ようとする態度を忘れさへしなければ今は凡て敬遠しておいてよいのである。必志里を論じたものでは新村博士の「東亞語原誌」（昭和五年）所收の「倭人語と馬來語」（昭和二年）が参考になると思ふ、九州殘餘の風土記逸文中、筑後の生葉郡や肥後の爾倍の簡條の所は「日本書紀」が關係して來るが、その他日向の櫛生村や壹岐の鯨伏郷の記述は、東國地方に比して古代九州の地名傳説が頗る賑かである點を喜ぶ以上今はごうする事も出來ない。

賀茂真淵の「續萬葉論」や「古今和歌集打聽」の中の記述は兎も角、大體が東よりも歌枕は優勢であつても言葉の上では所謂娘子達さへ當時の中央の人々に對して餘り教養の遜色を示さなかつたと思へて殆ど特異性が把握出來ないのが何だか物足らないのは、十七世紀の半頃蒐集された「諸國盆踊唱歌」を見てもその九州の五十首不足の歌に失望させられるの

を思へば文句は云へた義理でない「萬葉集」二十卷四千五百首の中から無理にでも我が九州方言を引き出す事は、鬱然たる大萬葉學が到底許すまいが、先づ危氣無い所で卷十六なる筑前國志賀白水郎歌十首の第六

荒雄良者 妻子之産業乎婆 不念呂 年之八歲乎 待騰來不座

あらをらは めこのなりをば おもはずろ ミシのやミせを まてぎきまさず

の第三句の語法であつて、是は新村出博士の「東方言語史叢考」(昭和二年)の「東國方言沿革考」(明治四十二年)に扱はれてゐるが、今一つは可なりの異論はあり得ても、目下の問題には寧ろ歡迎されるであらうと思はれるものであつて、即ち卷三なる所謂仙柘枝歌三首の第一

鞆零 吉志美我高嶺乎 險跡 草取可奈和 妹手乎取

あられふり きしみがたけを さかしみこ くさこりかなわ いもがてをこる

の殊に第四句の語法であるが、是は雜誌「能古」(昭和四年四月—昭和六年四月、九大法文學部國文學教室)で春日政治教授が「萬葉人の歌へる北九州」(昭和四年五、六、七、八、九、十一、十二月號、昭和五年六月號)の特に昭和四年九月號に詳しい。

何れにせよ第八世紀に集成された日本の言語資料からは未だ九州方言の特異性を抽出出来ないのが寧ろ當然であつて、單に文語ミか口語ミか云ふ從來の簡單な分別方法では複雑な言語生活の全豹を云々されないのは云ふ迄も無いので、吾人は文化ミ政治ミが影響する標準語の方處的差異を超越する普遍性には驚くが是は近世主ミして九州で育つた筈の南蠻文學資料なるもの、用語を検して見ても首肯される。三松莊一氏の「九州萬葉手記」(昭和四年十一月、福岡市、金文堂)の様な意圖のものには様々に扱はれもしようが、九州方言資料ミしては萬葉の撰者は殆ど何も残してくれなかつたわけであつた。上掲の二首の歌にしても既に昔から其の地方で永く傳承されてゐたものが偶然採録されたに過ぎないので、言語意

識の上からは殆き問題とされなかつたらしい。九州方言は併し是以後如何に取扱はれてゐるであらうか。

十一世紀初頭に出来上つたと見られる「源氏物語」の玉鬘たまかづの記述や、それから五百年も後の「人國記」で言語の批評に

筑後國（上略）言語ヲ飾ル事猶テ鮮シ（下略）

肥前國（上略）音聲ハ卑劣ナリ（下略）

なごは、彼の方言細川幽齋が「九州道の記」（天正十五年）で千利休への返歌

あまさかる ひなには猶そ 居たむなき さつこもおなじ 浮世なれども

を後世谷川士清とよよ（寶永四——安永五）が「和訓栞」の大綱において

九州の方言をよめる也

こしたのこ共に、薩摩藩士子靜伊地知季安（天明二——慶應三）が「漢學紀源」卷三において、彼の禪門の碩學たる南浦（名は立之、字は文之）が慶長四年上洛して大學を洛南東福寺に講ずるや餘りの評判の爲にやがて（年月不詳）禁廷に召されようこした所その薩摩辯が崇つて沙汰止みになり文之をして

宜哉言也、佛其有言云生王都難、詩不亦曰乎、邦畿千里惟民所止、其是之謂也、

こ慚愧させた事を想ひ比べるに寧ろ當然な感情表現であらうが、此の様な批評はその九州人を兩親に持ち而も四國以外なら殆き全國中を歩いてゐる長田幹彦氏が、例の祇園の舞妓禮讚は幾分割引して聽いてはみても、雜誌「婦人俱樂部」第十二卷第三號（昭和六年三月號）の「言葉に表はれる女性の優しさ」において、中國地方へは好意を見せてゐながら

（上略）九州へ行くに、それががらりと變つて、急に濁音が多くなつて、やさしみがなくなつてしまふ。私は熊本の産なので、九州の言葉にも一種の懐かしみはもつてゐるのだが、やさしいといふ點からいつたら、問題にならないと思ふ（中略）私は不幸にして、四國を知らない、文藝上の作品などに現はれてくる女の言葉をよむに、四國には何か

しら中年の女により多くやさしみこ、色めかしさがあるやうに思はれる（下略）
 こ書いたりしてゐるのを見れば思ひ半に過ぎるわけだ。

九州方言の成立

十六及七世紀へ跨つて即ち室町末から徳川初へ掛けて、内地方言は一大變化をする事となり逐次近代的の展開を示すが此の時代的變化は方處的差異を含んでゐた爲茲に悠遠な昔琉球方言と内地方言とを構成する日本語第一分裂期以來の變化を形成する事となり、我が九州方言は明確にその區劃を日本語の中で示す運命となつた。此の第二分裂期の年代を精細に指示される様になるには今暫く我が國語學の進歩を待たなければならぬまいが、此の間の具體的な文法上の一斑は春日政治氏、「桃山時代の國語に就いて」（昭和二年十一月、國語漢文學會講演パンフレット）や同じく「日本文學講座」（新潮社）第十四卷（昭和三年一月）及第十八卷（同七月）の「國語史上の一劃期」（「日本語法の變遷」）として同講座改訂新版第一卷所收）や吉澤義則博士が近著「國語史概説」（昭和六年二月）の「六 近代語の發達」なきを参照す可きである。特に

波行音の變化ミジヂ・ズヅの混同

二段活用動詞の一段化

は最も著しい現象であるとして良からうと思ふ。而して此の室町徳川の交以後九州方言の發達の歩みは頗る緩慢、否停滯して了つた爲に他の殆ど全部の内地方言から取り残されて了ふ事になり、従つて現代九州方言の基調なるものにはその特異性の外に丁度此の過渡期の内地方言一般の姿を含有してゐるに云ふ理論になるのである。

因に茲に注意したいのは日本語、否嚴格に言へば内地方言なるものの時間的區劃であつて、是を他の政治史乃至文化史を標準にして四分五別に細斷するのは日本語の性質や文獻の歴史から言つても少し大袈裟ではないかと思ふが、卑近な例

をこつて見ても日本語の歴史を大して軒輕の無い英獨語の如きは古代、中世、近世の三大別を爲すのであるが、元來俗語拉丁から發達して矢張り略同様な閱歷を有する佛語の如きは寧ろ何れか云へば古代、近世の二大別を用ふる方が普通であり、只露語の如きは系統こそ異質的ではない云ひ條元來古代ブルガリア語を文語として發達させた教會スラヴ語の大勢力の爲に純粹な露西亞文語が出現するのは漸く十七世紀半以後であるから新古の別なるものは立てられない云ふのなきは大分趣が異なるにしても、日本語を古代、近代を二大別するのが少しく不都合を生ずるのであつたら、此の室町末徳川初を中心とする過渡期のものへ中世日本語なる名稱を附し、従つて現代九州方言は中世日本語の形相を如實に保有してゐるに似たなら、東條方言學の所謂

琉球方言に原始國語の佛を想像した我々は九州方言に室町時代以前の古代語の姿を髮露する事が出来る。九州はこの古代語の世界である。「國語の方言區劃」、育英書院、昭和二年三月初版、二四頁）

云ふ命題の不足——方言價値の過重評價を見られぬにも限らぬ——を幾分か緩和出來ぬものか考へる。

次に此の時期を境として九州方言が本州方言への結合關係の轉換に就いては、橋本進吉教授が雜誌「民族」第叁卷第四號（昭和三年五月、岡書院）へ發表された論文を注意す可きであつて、即ち近世以降こそ九州方言は四國方言とも手を切つて凡ての他の内地方言、換言すれば四國を含む本州方言と關門海峡を隔てて對立する形式を構成する事はなつたが、少くも古代では内地方言なるものは本州東部のもの即ち東海道は遠江の濱名湖^{いんぼ}今切、東山道は信濃の鳥居峠、北陸道は越後の親不知^{しんしず}子不知に由つて陸路交通が極度に阻害された故、是等を連ねる日本アルプス山脈以東の方言の方が特異性を形成してゐて、彼の萬葉の東歌や防人歌^{さかひうた}を残した程であるから、昔の九州方言は四國を含む本州西部方言と握手し、相合して本州東部方言へ對立する形式にあつたを解するので即ち次の圖式となる。兎も角内地方言の空間的東西二大分説に對して我が九州方言を西部方言から獨立させた所に最大の功績ある東條方言學は本質的には益々肯定されるのである。

古代日本語

中世日本語

近代日本語

九州方言 A

西本州方言 B

東本州方言 C

C : B + A

C : B : A

C + B : A

内地方言

現代において尙内地の交通を少からず阻害する九州北邊の海峽も、本州を横斷する日本アルプスもは、日本の言語自身の發達を可なり複雑にはしたが、文化及び政治を合はせての中心地が西から東へ時代を降るにつれての變遷に比すれば何でもないのであつて、現代日本語を平面上にして概観する時、土佐、出雲・伯耆、東北地方、八丈島の方言が九州、否琉球にさへ性質を同じくするのは誠に東條氏が前掲の著で言はるる如く(四〇—一頁)

南北兩極の地方の方言の間に、多くの類似があること云ふ事はまことに見免すべからざる謎語であつて、學者の解決すべき興味ある好題目である

が、日本語の此の問題こそ、柳田國男氏がその「蝸牛考」(「言語誌叢刊」、刀江書院、昭和五年七月)で所謂「方言周圍論」なるものを今後益々歸納的に實證しようとする人々にまつては絶好の標的ではあるまいか。

現代九州方言の文法上の特異性に就いては簡單ではあるが東條操氏の「國語の方言區劃」二四—七及二九頁に要領よく記述されてあるが、更に吾人は此の上に參考す可きもの、中、音聲に關しては「音聲の研究」(東京市小石川區竹早町百廿番地、愛知社内、音聲學協會)第二輯(昭和三年十二月)所收の同氏の論文を、語法に關しては同じく「方言採集手帖」(郷土研究社、昭和三年六月初版)の「附録」なきを推擧し度い。是等を綜合して考へて見るに音聲のみに就いてさへ嚴密な意味で必ずしも九州獨特と稱され得る色彩は頗る影が薄くなる譯だが、此處では勿論比較的の主調を形成するに認められる特徴を記述すること云ふ前提の下に、聊か私見を以て是を整理補修して次に配列して見る事にする。

音聲

アクセント、是だけは佐久間鼎博士「國語音聲學講話」(昭和四年九月)の「一〇 アクセントの地方的相違」を参照。

「エエ」を「イェ」にする、南部及西部地方、驛(イエキ)。

「エー」を「エイ」にする、同上、丁寧(ティネイ)。

「オ」列音を「ウ」列音にする事が多い、虚言(スラゴツ)。

「ガ」行音の子音は全部有聲軟口蓋破障音〔g〕にする。

「クワ・グワ」の存在、大部分の地方、菓子(クッシ) 煉瓦(デングワ)。

「セ・ゼ」を「シェ・ジェ」にする傾向、先庄(シェンシェイ) 錢(ジェン)。

「チ・ツ」を「ティ・トゥ」にする、一部地方。

「ジ・ヂ」に「ズ・ヅ」の區別保有、特に南部、同(オナヅ)・鼻血(ハナヂ) 雀(スズメ)・鼓(ツツミ)。

「ダ」行音に「ラ」行音の轉換、身體(カダラ)。

「ハ」行音の子音を無聲兩唇摩擦音〔F〕にする、一部地方。

是等の外に南部の方言は更に次の様な現象を有してゐて著しい特異性を構成してゐる。

母音の短音化ミ子音の入聲化、様子(ヨス) 綱(テ) 帶(オツ) 行^イ申^モす。

語法

四段動詞連用形の音便、是は後へ「て」「た」が續く時に、「サ」行動詞はイ音便を、「バ」行及「マ」行動詞はウ音便を取るのが特徴となる、探イテ 遊ウだ 沈ウきる。

二段動詞の殘存、下二段は九州全部に行はれ只其終止形が連體形に同じな外は全く文語に等しい趣があるが、上二段

は東北部地方が主な様であつて其の他の地方では「出る」「寝る」も同様に「ラ」行四段に近い活用を行ふ。

「ナ」行變格動詞、文語に近く活用さす地方がある。

受身助動詞「ルル」の使用、大部分の地方で文語に近い。

使役助動詞「サスル」の使用、同上。

指定助動詞「チャ」、而も活用形が廣い、是は勿論「である」からの發達である。

敬讓助動詞「ゴザル」「マッス」、後者は併し今日では西部地方が主な様だが、語源は「御座ある」は兎も角にしても「參らす」の方は是を肯定する限り常識では今やその由來を忘れて了ふ程の變化をしたのである。

南部地方では更に頗る古風な敬語法の助動詞が多く保存されて居り是が爲に特異な形相を示すのである、ららっしる オサイチャル（お出である）　ます　モス（申す）。

否定助動詞「ザッタ」「ンダッタ」「ンチャッタ」。

未來助動詞「ウ」の接續程度、是は「む（ん）」から發達したのであるが、四段動詞以外への接續に於いて過渡期の姿を未だ脱しないのである。入れユウ、見ユウ、亡びユウ、來ユウ、爲ユウの形が多い。

推量助動詞「ラウ」「ツラウ」の接續及殘存、是も勿論「らむ」「つらん」から由來したのであるが、前者は接續方法において後者は使用殘存において特色となる、行くラウ　書きツラウ。

形容詞終止・連體形語尾「カ」、是は東部地方には見られないが「くあり」「くある」が變化したものと推せられ、松下大三郎氏が「標準日本口語法」（昭和五年二月）で所謂「特別ラ行變格第四活段」である、風の烈しカ　美しカ花。

助詞、主格「の」、目的格「バ」、方向「さま」、目的「ケ」、理由「ケン」や又強勢の「こそ」「はし」の訛つた形を用ふ。西部地方で使用する反對の「バッテン」（ばこても）は九州方言の標識ともなる程著名であるが、筑後・肥前・肥後一體

に行はれる命令法の「ろ」は本州東部方言が近世以前に影響したのではないか見られてゐる。

省略法、是は聊か冒險だが指定助動詞さては主格助詞をも省略する文章構成法が殊に人稱代名詞を主語に載く時見られる事例へば「私、九州人」云ふ様な言廻しが九州の何處かにそして如何程迄残つて居るかを今後の宿題として注目されたるなら、九州方言のみ云はず廣く一般の日本語の發達史上頗る興味ある事自己分は思ふのである。

語彙

日本語として琉球や本州東北地方等にも同系語の存する「アド」(踵)や「ムヅカ」(可愛い)さては肯定の返答に用ふる「ナイ」等よりもより特異性を示す可き「サルク」(歩く)「クルブク」(俯伏す)の如き單語、「太カ」(大きい)「細カ」(小さい)の如き特有の意義用法、さては様々の接頭・接尾語の中で九州獨特のものを注目す可きであるが、更に人口最も稠密な筑後川下流及遠賀川上流地方を中心として日本全國總産額の大半を占める炭礦の採炭人の特殊語は決して無視出來ないと思ふし、次に外國語としては近世になつて特に西部地方において夥しく混入した支那・南洋・葡萄牙・西班牙・和蘭の言語を意味するのであるが、更に一時は豊後及西部肥前を中心として日本内地の基督舊教徒の過半を算へられた此の地における切支丹關係の拉丁系語彙の活躍を忘れてはならない。

現代九州方言の空間的範圍は行政上所謂「九州地方」の廣袤は有しないのであつて、沖繩縣は無論の事であるが鹿兒島縣下の薩南諸島の南半を擁する大島郡は琉球方言圏内に屬する上に、北九州の瀬戸内海に近い方面は明治維新以來急激なる交通發達の爲に今や表面から見ては殆どその特異性を認め難い程本州方言に蠶食されつつあるのである。さて此處に今吾人が問題とするのは九州方言現在の内部區劃だ。中國山脈の延長である筑紫山脈と四國山系に呼應する九州山系が古人に由つてその地形を木菟に譬へられた凡二千三百餘方里の筑紫洲の住民の言葉をその家屋の様式なごも同じ様に夙に區分してゐるたであらう事は當然想像され、十七世紀始めの彼のルドリギシ大文典においても不完全ながらその考へは大體迪

られはするが、是亦前述の内地語の空間的區劃は又自ら異つた意味において三分説と二分説とがあり、而も穩かに妥協し得る性質のものなのである。東條教授は明治四十三年以來の研鑽を以て大正十年に雜誌「國語教育」第六卷第六號に發表された論文以來、殊に九州方言區劃においては名稱さへも變更されて居らぬ次第だが、此の名稱はその使用範圍こそ少しく趣を異にしてゐるが高野辰之氏の「日本歌謠集成」卷十二近世篇、第三篇（昭和四年二月）なきと全く同じであり、異議なく流布させてよい性質のものである。今是を順次に展開する。

東條操氏の「大日本方言地圖」及此の説明なる「國語の方言區劃」では西、東、南に三大別して、是に順次肥筑、豊日、薩隅方言の名稱を與へられたが、是は「アイ」二重母音の變化、上二段動詞の活用形、形容詞の語尾、種々の助詞の用法によつて標準を立てられたので至極尤もであつて、藤田元春博士が新光社の「日本地理風俗大系」第十二卷「九州地方篇上」（昭和五年三月）の「人口と聚落」において、その民家様式に三大別を認められる如く方言にも無造作に三大別を施されてゐるのなきは兎も角、原田芳起氏が雜誌「國語と國文學」第七十七號（昭和五年九月號）の論文では、先づ南北に分け次に北を更に東西に分けてもよいとなし、東西の差は極めて僅かであるが是を合して北と南と對比する時は、北と本州西部方言との間におけるよりも甚しい懸隔のある事を主張力説されてゐるが、春日教授は最近是等の分類の何れをも肯定是認する頗る興味ある名稱を提唱された。即ち同教授は昭和六年三月十一日福岡放送局において、敬語助動詞に由つて南方言を「モス地方」、北方言は東を「マス地方」、西を「マッス地方」と稱し得るを發表された（熊本市花畑町、日本放送協會九州支部、「放送講演集、九州方言講座」、昭和六年五月）。

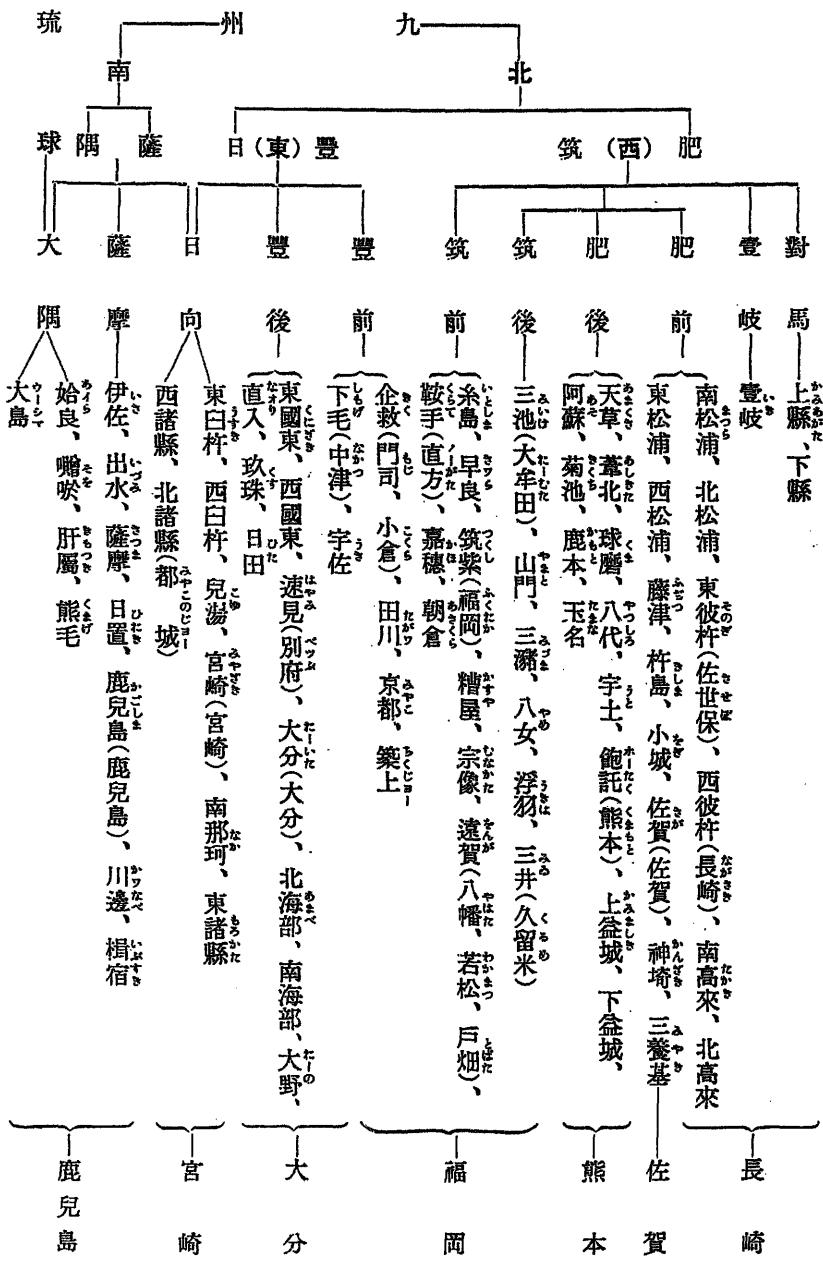
言語の統一が専ら交通に由るものである以上、特に徳川時代の封建制度は此の小さな島にも多くの小方言を作つた筈であるが其の詳細な認識こそ今後の我々の宿題としておいても、明治以後の行政區劃は縣人意識を刺戟する以外は寧ろ九州方言の區劃概念を可なり複雑にしたのであつた。

方言

國

郡 (是に包圍されてゐる市を括弧内に記す但し昭和六年六月現在)

縣



九州方言の特異性

昭和五年十月一日の國勢調査によるもの。

内地人口總數

福	岡	佐	賀	長	崎	熊	本	大	分	官	崎	鹿	島	沖	繩	縣
六四、四四七、七二四	二、五二七、〇七九	六一九、四五二	一、二三三、八一二	一、三五三、九〇八	九四五、七五一	七六〇、四五〇	一、五五六、六七四	五七七、五〇八								

而して福岡市（二二八、二九〇）及長崎市（二〇四、一七九）の外十萬以上二十萬以下の都市は八幡、熊本、鹿児島、佐世保、門司の五市であり、五萬以上十萬以下のものは大牟田、小倉、久留米、若松、大分、宮崎の六市であるが、九州においては總じて社會單位として都市は重要なものでなく只北端の狭少な地域に數箇の都市が集合聚存してゐるのが稍々注目すべきであるのみで、その代り町村は殊に南九州のものは密度こそ大ではないが人口一萬を超えるものが頗る多數（九十箇以上）存し従つて方言調査に當つては町村特に村落を重要視する必要があるのである。

以下各小方言の説明は「國語の方言區劃」（廿一及廿八―九頁）を基としたのであるが、此の外特に東條教授が最近御教

示下された未發表の知識に由る所が多い。

對馬はその地理的位地の爲に複雑であつて本州西部方言の交ぜ物を認められるが、若干の語彙を除いては朝鮮語の影響は一部世人の想像以上に稀薄なのである。豊岐は大體筑前に近いミ考へられる。

肥前、肥後、筑後は上古には本州の東國語の影響を可なり受けたミ見られ、近世は外國語の混入が他の九州の國々でも餘り見られぬ程濃厚に認められ、而も地域の比較的大なるに不拘統一がよく保たれてゐて代表的九州方言ミ稱してよく、是を更に何箇かの小方言群に分割するのは今後の問題だが只五島方面（その大部分は南松浦郡）は今後の研究の結果は知らず矢張り肥前ミ同系統なのであるらしい。

筑前は筑後・肥前・肥後を一群ミするものへ對立する事恰かも本州西部方言の一部をなす近畿方言を更に京都方言を中心とするものミ大阪方言に近いものミに分類する必要あるものミ同様な關係にあるが、特に福岡市ミそして漠然たる言ひ方ではあるがその周圍の諸郡は特徴が著しいのであつて、此の一市數郡更には何町村かの限界を明白に指示するのは今後此の地方の人々の研究題目であり義務であらう。

豊前、豊後は瀬戸内海を控へて今後益々近代化するこゝであらうが、日向は南西部の西諸縣・北諸縣兩郡全部、そして東諸縣郡の西部大部分（木脇村全部ミ本庄町大部分ミを除いた地域全部）ミは島津藩であつた爲、東九州方言ミ南九州方言ミを區別しなければならぬが、併し東諸縣郡は近時大に宮崎化しつつあり、此の間に引く線は一元的に行かない。「大日本方言地圖」の境界線は「國語の方言區劃」においてももう少し説明される可きであつた。

薩摩の薩摩郡の甌島は本土ミ大した差異がない様であるが半島の極南地方には著しく特異な方言が存する様であり、大隅は前述の諸縣二郡ミ連絡する贈啖郡（舊稱南諸縣郡）を始めミして本土のみならず種子、屋久を主島ミする熊毛郡、更に南方の奄美大島群島（琉球方言）や川邊十島を總括する大島郡を含み、薩摩ミ合同して内地方言ミ琉球方言ミの橋渡しの

役目をするが、是等の南九州方言は東部の日向や北部の肥後の隣接諸郡へ影響を與へてゐる外、西南方の海上の島々では琉球方言との限界が稍々複雑であつて、大島郡の川邊十島中、寶七島の方言所屬は今後の研究題目である。

九州に於ける幾多の諸侯の興亡變轉の中にあつて島津家は建久年間（十二世紀末）島津忠久以來南九州に威勢を張つてゐた爲め、南方言は藩主代々の政策に助長されて内地方言としては頗る距離を有する姿を發達させたが、薩隅本土の所謂鹿兒島言葉は實にその地理的位置からは琉球方言圏内に近い熊本郡の島々よりも却て特殊な色彩を南方言の中においてさへ構成して居るのである。北方言にも此の點で記憶す可きものがあつて、即ち延享四年（一七四七）に磐城の平藩主内藤政樹が日向の延岡へ、文化十四年（一八一七）に同じく磐城の棚倉藩主小笠原長昌が肥前の唐津へそれぞれ國替になつた結果、九州の東及西方言圏内において僅かながら本州東部方言の所謂「言語の島」を作つて居り、即ち宮崎縣東臼杵郡延岡町の舊藩士の系統を引く人々の家中辯なるものも佐賀縣東松浦郡唐津町の廓内・廓外を總稱する城内の人々の言葉（佐賀辯に對する唐津辯とは又別なもの）もは早晩は地元周圍の言語の中に其の元來の姿を埋没消滅して了ふであらうにして今この所全國の方言區劃中においてさへ最も珍重す可き標本を示してゐるのである。

九州方言の記録

近世になつて日本語の記録が豊富に残るのは當然であるが、中央の標準語の眼から見ると單なる西陲の土語であり、外國の人々から眺めては日本語なる衣の中へ全く隠れて了ふ九州方言も、橋本進吉氏の「吉利支丹教義の研究」（昭和三）を讀むと、長沼教授が「南蠻文集」（昭四）で所謂九州の土音なる物は聊か怪しくなるのであるが、是は後で述べる。

先づ彼の「日本風土記」を祖上に登す。是は明の萬曆年間（十六世紀下三分一より十七世紀前半）に倭寇を防いで功があつたといふ明の侯繼高が「全浙兵制」の附録を爲す書物であつて、五卷ある中、卷之一の倭國事略、倭船、倭好、寇術、

倭刀や卷之二は今不用なのだが、卷之三の字書、卷之四の語音や卷之五が入要なので殊に卷之四は九州方言資料としてその當時の特異性を指示する絶好の材料なのである。此の日本風土記は欽定四庫全書總目提要卷一百子部兵家類存目に

兩浙兵制四卷 浙江巡撫採進本 明侯繼國撰(中略)第四卷爲日本風土記(中略)有錄無書疑裝緝者偶佚之也(下略)

とあつて解題がしてある。内閣文庫の明版を對照したミ云ふ珍書同好會本(大正四年七月)には「全」「高」もあり、雄山閣の「大日本史講座」第十七卷(昭和五年十月)なる中山久四郎博士が「支那史籍上の日本史」には此の二種の名稱を別々に使用されて居り何とも注意しないのであるのを見るに、本文批評の問題であらうが是は今差當り枝葉を見倣して本題に入るが、此の書物中に交つてゐる九州方言資料は大部分春日教授の前述のパンフレット「桃山時代の口語に就いて」に摘出してある。漢字は順序が時に錯雜顛倒し、平假名は拙劣な爲判讀に苦む所があるのみならず間々脱落さへあるが

風息 革熱勿革那 かせふく (天文)

日入 非路骨 那那 ひのくるる (同上)

湖伏陀革一潔 ふかいけ (地理)

なきは勿論「革熱那勿革かぜのふく」「非那骨路路」「ふみかいけ」が何時しか誤寫されたのであらうが、極好人一蓋逆目 搖革許多 (人物)

は「いかにもよかひこ」の事であらうし、その他自分の氣が附いたものには

至誠人 莫打 またいな (同上)

無禮人 擲乃 かいな人 (同上)

煮不熟 和六尼 おろにやた (調和)

なきいふ面白い例がある。

ジュアウ、ルドリギシ（一五五九—一六二〇）が彼の母國語葡萄牙文もて長崎耶穌會學林で慶長九年（一六〇四）から十三年へ掛けて刊行した日本紙刷二百四十枚の「日本語典」三卷こそ餘りに有名な國語學書だが、元來が極く少數しか刷らないであつたらうと思はれる此の貴重な大文典は今や英國オクスフォードのボドレイ文庫に葡國リジボア郊外アジュダ文庫に僅か二部しか傳はらないのは兎も角、此の便利な時勢にロートグラフ本にしてからが誰にでも一寸一見出來難い以上、雜誌「民族」第二卷第一號（大正十五年十一月）の橋本進吉氏の論文なきは貴重なものとしなければならぬのである。當時の葡語の綴字が現代葡語と異なるは勿論現代の葡語辭書では解決出來ない語さへある上、Rodriguezなる姓をへ今では西班牙風なのであつて、Rodriguez（ルドリギシ）が葡萄牙人としての姓たる可きをや。兎も角併し此の文典の卷二の方言部にある「或國々に特有な言葉遣や發音の訛謬について」を題する條下は目下の吾人にまつて熟讀す可き文字に充てる譯で、當時所謂「下」を呼ばれた我が筑紫の方言の特徴の中、特に筑前博多のクッ・グッミバ、そしてバミクワの音聲轉換は、敢て九州のみ云はず何處にでも見られるダ行音ミラ行音ミの相通や、昔或時代の佛國巴里人が流行させたズミエの轉換所でなく、説明困難な種々な音聲現象の中で最も手近な例證の一として記憶す可きものである。

貝原益軒の數種の紀行文と共に柳田國男氏が校訂されて博文館の「帝國文庫」第廿二篇として刊行された「紀行文集」（昭和五年）に含まれる大部分のものが筑紫方面であるのには是を丹念に翻いてこれ程我が九州方言の片影を拾ひ出せるかを思ふに、時代から考へても佐賀藩士山本常朝（萬治二——享保四）の談話を同じく田代陳基（延寶六——寛延元）が聽書して十八世紀の十年代において作つた所の肥前論語又は鍋島論語と呼ばれる「葉隠」なきを忘れずに指摘して置かない譯に行かない。尤も此の種の純然たる修身書の片言變句をまで漁つて九州方言資料として懸け並べなければならぬのは故人達に對して或は禮を缺くかも知れないが、兎も角は其他の數書を合せて葉隠記念出版會（東京市四谷區左門町六十八番地）刊行の書物（大正五年）は三版を重ねて天覽まで賜はつて居る。編纂者が本文中の方言・難句中の稍々複雑困難な

ものを收輯して註解を加へた卷末の「難句略解」は僅か四頁しかないとは云ふものの今後の方言書目中には是非収録すべき性質のものであらうと思ふ。天明七年（一七八七）に七十餘歳で没した武州越谷こしがやの俳人吾山ごさん（又五山）の墓は雜誌「方言ミ土俗」（盛岡市新馬町仲通り、橋正一氏方）第一卷第一號（昭和五年七月、再版十一月）の大田奮姓田村榮太郎氏の論文に依るに今日もう行衛不明になつてゐるが、その安永四年（一七七五）に上梓した「諸國方言物類稱呼」五卷は今や日本方言學の古典たる可き位置にあり、假にその二篇三篇が豫告通り出たところで九州方言資料を求む可く餘りに公平な眼界で書かれたらしいが、卷五言語げんごの「わるいミいふ事」の條下にある

（上略）筑紫の方言にてよめる歌に

櫻はな さへてなじかい 散ていろ おろよか風の ふいたけんこつ （下略）

なきこあるは兎も角、同じ卷の「〇他の呼よびに答得語」なきこそ其の例證に多少の異論は出ようが、自分は彼の佛蘭西で、「オイル語」・「オク語」なる名稱に依つて北・南方言を立派に示す事の出来る幸福を羨まずには居れない。だから金澤庄三郎博士が「日韓兩國語同系論」（明治四三）には此の點自分は失望しつつ北里圃きたし氏が「日本語の根本的研究」（昭和五、大阪府豊能郡豊中町字櫻塚千五番地、紫苑會）の臺灣アミ族高地蕃里漏社調査記（臺灣之部三五頁）を得難い手記ミし度いのである。何にしても「日本古典全集」第四期刊行書の一として物類稱呼がもつてく、廣く流布したら様々に面白いファンが出る事であらう。伊勢の國學者谷川士清が著「和訓栞」はその死後刊行されたのであるが、首卷（安永六年）の「大綱」〇言語其方俗あるは云々の所で豊後辭の歌ミして

きのふ見ちえ きふ見んしひか くいしいに 二日ミ見ずは うさうさうしやう
おれもわりう おむひはすれぎ きうしうろ つひにあふえじ しんきなんじやり

の二首を掲げて語釋をしてゐる。

彼のリネの門下なる瑞典の植物學者カール、ペータ、トゥンベリ（一七四三——一八二八）の「航海記」四卷（一七七〇——九、ウプサラ）の日本紀行の中には彼が訪れた長崎の方言が記されてあつて

Omai finosuwa guserimassinka.

Nagasaki wa kekonno tokorode guserimassur.

の如き語例が見られる。此の航海記はやがて英獨語に譯されて各數版を重ねてゐるが、一七九六には此の日本紀行の部分だけの佛譯が出て居り、此の佛譯本は最近駿南社、「異國叢書」の一篇として山田珠樹氏の譯註による「ツンベルグ日本紀行」（昭和三）が出版されてゐる。然るに此の邦譯書は佛譯本の「第十四章日本語」を村上直次郎博士の注意に依るゝかで大省略してゐる爲、吾人が九州方言資料といふ註文で臨むに殆き役に立たないのであるが、茲に面白い事には別な方面から此の長崎方言の一部が再び吾人の目前に表はれる事になつたのである。それは彼のチエンバレンの外祖父に當るバズル、ホールの「航海記」（二八一八、倫敦）の附録として、同じく一八一六にホールに率ゐられて琉球を訪れた英艦乗組の海軍大尉クリフォードの手記になる「琉球語彙」があるが、此の語彙の更に又附録たり一部たる「日琉語對照表」において用ひた日本語なるものは前述のトゥンベリ航海記英譯本第二版（一七九五、倫敦）から採録したのであつた結果自然彼の長崎方言が再現する事になつた。形容詞語尾「か」や二段活用動詞が九州方言としての特徴を明瞭に示してゐる。ホールの航海記は今日でも珍本ミニ云ふ程の代物でもあるまいが、クリフォードの琉球語彙は東條操氏が「日本方言資料」の一部として「南島方言資料」（宏徳會紀要第一冊、大正十二）の中に掲載され従つてトゥンベリの九州方言も一部分は一般に紹介される事になつたが、東條氏の南島方言資料は關東大震災の爲殆き全滅した所最近「言語誌叢刊」第一期刊行書（昭和五）の一冊として再び世に廣く出る事になつたのは我が九州方言學上大いに喜ぶ可き事と思ふ。

本居宜長が晩年の隨筆「玉勝間」（一七九三——一八一〇）七の卷第六十二條なる「ゐなかに古への雅言ミヤゴトののこれる事」

において、肥後では口語に二段活用を行ふ中に、少し言葉をもつくらふ程の者は當時矢張り標準的な一段活用の使用をしたがつてゐた事を記してゐるし、瀧澤馬琴は方言に就いては自ら採録した程の熱心家であり又眼界も随分廣かつた様だが九州方言に關しては残念ながら殆き皆無な様で只その遺稿の一部が外孫渥美正幹に由つて編まれた「曲亭雜記」(明治二十一年——三)第二輯上編〇かんかんのう踊唱歌（おどしやうか）の譯並ニ評の所で日向の歌

わしがおしやんすに手ぬぐひもやつたチウがしらんチウ いろはかすりかけチウ やるこたやつたチウが物に
、ならんチウ いろ事こもしそこなつてヨカタイヨカチウ

を記してゐる。併し吾人は生粹の九州人の手記になる方言資料として春日政治教授所藏の福岡藩士井土周磐(ふんど)(天明二——文久二)が天保十年に書き遺した「小學方言講義」なる冊子なきの方を重要視したい。是は朱子の小學を當時の博多方言で講釋した半紙六十餘枚の頗る思ひ附きな代物である。同じく幕末のものと思はれるが藤井乙男博士所藏の「長崎こまば」は半紙五、六枚の小冊子ではあるが純然たる方言書であつて是は近刊の雜誌「方言」(春陽堂)へ轉載される筈である。

長崎を訪れた多くの外人の中、その母を北米土人チヌク族に有する冒險兒ラナルド、マクドナルド(一八二四——一九四)が世界一週の途次嘉永元年から翌年に掛けて長崎滞在中の見聞記「日本」ある事は、ペリ提督の來訪は又異つた意味で文化史上特筆す可きであらうが、此の書物はウィリヤム、ルイスミ村上直次郎氏の校註を附して一九二三に東部華盛頓州歴史協會から限定一千部として刊行され、その第三三九號を新村先生が入手され豊田實博士に貸與中、偶然ある機會でその附録第三の日本語彙が九州方言なる事を同博士が注意された故此處へ紹介傍々書き留めて置く事にする。此の語彙の原稿はヴィクトリア市の州立圖書館に保管されてゐるのである。今九州方言としての特徴のみを摘出して見るこ

Warka——Bad

Youka——Good

Fruka——Large

Comaka——Small

Etaka——Pain	Tsukuseka——Pretty
Neptaka——Sleepy	Onsaka——Stink
Kiska——Tired	Shruka——White
Kufraka——Black	Yaska——Cheap
Katraka——Dark	Omosroka——Entertaining
Eiaka (Highaka) ——Fast, quick	Hoska Musume——Granddaughter
Hoska Musuko——Grandson	Onka——Lift
Naka or Naran——Not any	etc.

多少の聴き誤りは兎も角明瞭に寫されてゐる。何れも只形容詞語尾のみ位しか記されていないのは聊か物足らないが、此の形容詞語尾については彼の長崎出島最後の商館長なる和蘭人ドンケル、クルチウスの「日本文典稿」(一八五七)にも注意されてゐるのであつて、従つて日本へは來なかつたが是を基^よとして自ら著はした獨逸人ホフマンの「日本文典」にも論ぜられてゐるのである。今手近の英文のもの(一八六六)を見るに、第二章形容詞の箇所(百六頁)に

長崎の俗語は形容詞語尾キにカを代用す、かくて白きを白か
とあり、そして脚註に

Donker Curtius の日本文典稿(一八五七)三十四頁において以前論ぜられたる語尾カは眞に長崎方言特有のものなりや否やと云ふ問
題は、日本人によつて口づから、同じく長崎において日本語の蘭通事として滞在してゐた故人 P. J. Saint Anaire によつて書面を以て
以後肯定的に答へられた。後者は余に書信して曰く

『形容詞語尾アは事實長崎においては一般に用ひられ居れり、而して下層民はかくせざれば理解せず、少しく教育ある者共は併し此
の正しからざる事をよく心得居れり。』

にしてゐる。

探せば未だ出て来るだらうが二十世紀に近くなつてから及び以後のものは次の書目や目録に詳しい。

東條操氏、方言研究書目（「郷土研究」、郷土研究社、第四卷第七號、大正五年十月）

東條操氏、國語方言資料目録（「國語教育」第十二卷第三號、昭和二年三月）

時枝誠記氏、國語學關係刊行書目（「國語と國文學」第三十七號、昭和二年五月號）

田村（改稱大田）榮太郎氏、方言參考資料目録（「國語國文の研究」第十五號及第十七號、昭和二年十二月及昭和三年二月）

田村榮太郎氏、國語學附言語學參考論文目録（「國語と國文學」第四十九號、昭和三年五月號）

東條操氏、方言書目抄（「方言採集手帖」、再版計劃中）

是以後の特に昭和四年以來の書目は獨り九州に云ふ意味でなく素晴らしい盛況であつて是だけで雜誌の特輯號位の價値は充分あると思ふから是で切り上げる。

佛蘭西のジイエロンの方言圖卷や英吉利西のライトの方言辭典の何分の一かでも出る迄に、獨逸のメンツの方言研究書目程のものさへ作らうとするには、何れの責任かは兎も角その土地で出た相當な方言關係書さへ先づ手に入れようとする氣の無い大小の圖書館がもう少し眞の郷土學に云ふものに目醒めなければ望みは無い。「此項完」（昭和六・六・廿二）

追記

伊波普猷氏の琉球語母音及口蓋化論の要領は音聲學協會「こまの講座」（研究社）第一輯（昭和六年七月）にも所收。

本邦地名蝦夷語解釋に就いては雜誌「民族」第壹卷第四號（大正十五年五月）の金田（きんた）氏「アイヌ語學研究資料に就て」が必讀の論文であるが、是に紹介されてある彼の熊襲を「クマウツ」（魚棚の多き山懐の地）とし、熊本を「クマプト」（玖摩川口）にする白野夏雲氏の論文は初め「東洋學藝雜誌」へ出したものを地學協會報告へ轉載したのであ

つて、最近金田一教授から歴史的には兎も角學説としては幼稚なもので今日から見ても採用出来るものは一つもないのではないかと思ふ由を御教示下された。

「日本風土記」の著者名に就いて東方文化學院京都支部の吉川幸次郎氏の返書を得たから序に記して置く。

(上略) 學院二三諸君之を簿録に徴して知り得たる所を報道申上候、按ずるに兩浙之全浙は其義相同じければ市村博士云ふ所之四庫録する所之同一の書たるは疑を容れず、然らば繼國繼高當に一誤あるべし、今明史藝文志を検するに地理類に侯繼高日本風土記四卷を著録す 王鴻緒明史稽覽 文志また同じ 又清の丁仁の八千卷樓書目には子部兵家類に兩浙兵制三

卷明侯繼國撰日本鈔を録す、明志の繼高に作るは市村氏に同じく丁目の繼國に作るは四庫に同じ、群書淆亂して是非を定むる莫し、然れども市村博士已に内閣の秘本に據つて言を爲すに似たり、然れども 提要曰日本風土記有錄無書

目の傳鈔の本に據るの比すべきに非ず、宜しく市村氏に従ひて全浙兵制侯繼高撰に作るを是とみなすに似たり、然れどもこれも想像の言にしてその必ず然るや否やは親しく内閣の本に就きて檢したる後に知り得べしと存候(下略)

西班牙の布教士チエゴ、コリヤツオ(一六三八没)が一六三二に羅馬で刊行した拉丁文の「日本語典」の版本は日本でも東西兩帝國大學にありロートグラフ本は九大の長沼教授も所藏されて居るが、是に九州方言の記述がある。東條教授の書目や目録(従つて田村氏の方言目録)にはあるけれども、東大本を曾て一讀された橋本教授の御記憶や最近意識的に此の點の調査をして下さつた前島儀一郎氏や服部四郎氏の直接間接の報によるに、少くも積極的には九州方言の記載は見當らない。そうであるから自分はわざと本文には省略しておいたのであつて、只その中に引用されてある和文を當時の九州方言に見做す可きや否やに就いては同じ人の手を経た「懺悔録」と共に總じて所謂南蠻文學口語資料なるもの問題であり、「岩波講座、日本文學」の「南蠻文學」(昭和六年六月)なき此の點自分は何だか新村南蠻學の退歩ではあるまいかと考へるのであるが、此の課題は「九州方言の文學」の項において少しく論じて見る心算である。(昭和六・七・廿五)